常磐東小学校　校長だより

# 常なる磐

つねなる　いわ

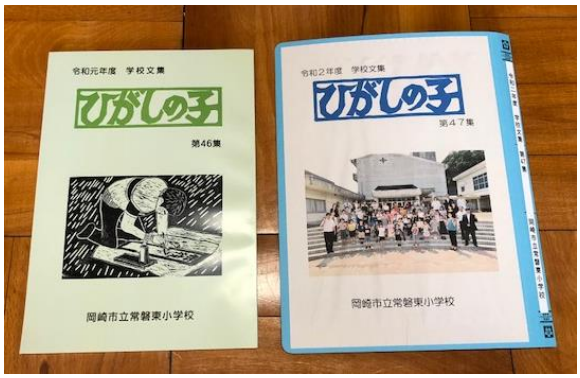
令和３年３月 12 日(金)

## ◇ 学校文集【ひがしの子】第 47 集

様々な理由で廃刊となる学校もある中、本校は､これまでと同様に｢学校文集｣を発刊する。

初刊の刊行が昭和 48 年。校舎移転前から続く文集は、本巻で第 47 集と歴史が深い。

ご家庭に配付できるのはもう少し先になるが、カラーページを増やすなどの新たな工夫も加えた【常磐東小学校　学校文集「ひがしの子」第 47 集】をお楽しみいただきたい。




▲左：Ｒ元年度 46 集　右：Ｒ２年度 47 集

写真にあるように、今年度は装いを新たにした。「冊子」から「ファイル」への変更である。これにより、単価をかなり抑えることができた。実のところ、今年度のＰＴＡ会計は、やりくりを間違えれば火の車となっていたところであった。

寄贈品バザーと運動会食品バザーの中止や、緊急事態宣言の発出を受けた資源回収の中止に伴う収入減は、緊縮財政で何とかやりくりしていたＰＴＡ会計もマイナスに切れ込みそうな状況が見えていた。そこで何か手を打てないかと、最後に目を付けたのが「学校文集」である。

「廃刊を視野に入れて…」というよりはむしろ、「廃刊の方向で…」と臨んだ職員会議で、担任の先生から「残したい」という声が挙がった。なんと全員である。

前向きな声の根底にあるのは、毎日接している【子どもの存在】と【子ども自身の思い出づくり（残し)】である。「子どものために…」なのである。

「さすが、担任である」と改めて思うと同時に、温めていた腹案を出す。文集を印刷業者に依頼するのではなく、職員手作りで行う腹案だ。当然のことながら、そこに費やす時間と労力は例年の比ではなくなる。それが見えている。見えていても、「やる」方向で決着する。

おかげで１冊千円以上かかっていた学校文集が、数百円で刊行できる運びとなった。教頭先生のおかげもあり、ＰＴＡ会計のマイナス計上回避も見えてきた。

それでも、発刊はもう少し待っていただきたい。

製本作業は、なかなか大変なのである。

文集配付は児童の家庭のみとなる。紙面を借り、「はじめに（校長）」と「おわりに（教頭）」執筆分のみ、以下に掲載する。

学校文集「ひがしの子」　第四七集の発刊にあたって　　校長　　近藤　善紀

学校文集「ひがしの子」は、本巻で四七集の発刊となる。つまり、年月を重ねること四十七年。初刊の発刊は、昭和四十八年である。本文集は、昭和から平成をまたぎ、現在の令和と三つの元号を歩んできた深い歴史がある。編集に係る労力や金銭的な負担から、学校文集の廃止の風潮が進む中、本年度も継続して発刊するに至った最大要因は、本校教員、特に担任の熱意に他ならない。

本文集のよさの一つに、作文の「手書き」がある。ひらがなから習い始めた一年生であるが、作文には漢字が混じる。これだけでも、学びの成果がうかがい取れるが、綴られた元気で伸びやかな文字が、一年の成長を表している。鉛筆をしっかり支えられずに文字が震えていた痕跡すらない。完成した作文を通し、こうした成長を最も感じ取っているのは担任であろう。しかし、数年後、十数年後、さらには年老いてから文集を紐解いたとき、自分が綴った文字を通して、しみじみと自らの成長を感じ取ることができる。

さて、ここで文集ができあがるまでの流れを説明しておきたい。本校に赴任するまで中学校しか勤務経験のない自分にとって、本校の作文指導の丁寧さには、感動を覚えるほどの衝撃を受けた。思いのままに綴るのも味わいが生まれてよいが、本校の文集作文には、正しく適切な学びの手順、そしてさりげない教師の支援があることをお伝えしたい。

はじめに、自分の生活を振り返らせ、思いを巡らせながら作文の軸に据える内容を決めさせる。続いて学習プリントを使いながら作文を構成させる。つまりレイアウトだ。何本かの柱を作って主構成を行い、作文の見通しをもたせ、この柱に肉付けしていくのだ。まさに作家活動である。書きたいことが決まっている子ばかりではない。文章を書くことを苦手としている子は、自分を振り返る第一段階からつまずく。ここで教師が少しずつヒントを出す。少しずつというのが大事で、最後は自分で決めたと実感できるように仕向ける。こうした場面に直面すると、寄り添う指導の重要性を再確認する。

続いて作文の下書き、清書へと入っていくわけだが、自分が行ってきた誤字や脱字の点検が主な指導に対し、本校は子どもの思いを引き出す支援が加わる。複数回の下書きを経ると、次は教師が全ての作文をパソコンで打ち直す。これは構成の再確認の意図もあるが、メインは子どもが行う清書のための手本である。これがあるから、子供は安心して清書ができるし、自分で確認もできるのだ。一生残る文集作文とはいえ、教師のさりげない丁寧な指導に驚いた。

本巻より、文集に新たな手法を加えた。文集のファイリングである。常磐東小学校での学びを終えた時、六年、六巻の文集を一冊にまとめるもよし、自分の六年間の作文をまとめるもよし。六冊の冊子を上手に一つにまとめることで、自分の思い出をぎゅっと詰め込むことができるようにした。段階的な移行であるが、ファイリングをうまく利用し、思い出を残してもらいたい。

---

あとがき　　教頭　鈴木紀予子

この一年、学校行事は変更を余儀なくされ、今まで経験したことのない活動を重ねました。それらは、負担に感じる面もありましたが、私たちを大きく成長させる力ともなりました。学校文集「ひがしの子」四十七集には、私たちを取り巻く環境が大きく変化したこの一年間の思いが感性豊かに綴られています。

令和二年十一月十五日、たくさんの地域の皆様のご協力のもとに、「常磐東小学校創立百二十年記念式典」を開催することができました。この文集は、このときにみなさんが宣言した「常磐東っ子百二十年宣言」にある、ふるさと「常磐東」を「誇りに思う心」であり、頑張り続けるみなさんの「心の財産」であり、「未来を照らす光」でもあります。

思いを書き切り、自分を振り返り、さらに心を磨いていく。こうして生まれた文集を折に触れ読み返し、豊かな自分の将来への道標としてください。